

文化・芸術

「柿」

1915年、絹本彩色
142.0cm×49.9cm

速水御舟 (1894~1935年)

速水御舟は東京・浅草に生まれ、14歳で歴史画の大家松本楓湖の画塾に入門。塾には若き日の御舟に大きな影響を与えた今村紫紅や、互いに刺激し合った小茂田青樹らがそろっていました。

1914年12月、この画塾の若手メンバーらとともに紫紅が立ち上げたのが「赤曜会」。西洋を意識して日本の絵画を見つめ直す革新的な勉強会が開かれました。印象派をまねて戸外で写生し、東京目黒の夕日ヶ岡にテント張りの野外展を開催するなど、型にはまらない感覚の中から新しい表現が次々と生み出されていきました。

しかし発足後約1年で紫紅が急死し、赤曜会は15年11月の第3回展で解散してしまいました。本作はこの第3回展出品作7点のうちの1点。御舟21歳の作です。同時期に描かれた紫紅の「秋の柿」との影響関係が指摘されます。短い生涯の中に激しい振り幅を繰り広げた御舟の、対象の真実に迫ろうとする姿勢がすでに見とれることでしょう。

次回企画展の第1部「近代の『日本画』—四季の彩り」で展示します。
(小此木)

《名画の扉》

企画展「The日本・画—大川美術館のコレクションを中心に」から

